

はじめに

—情報メディアセンターの新しい試み—

名古屋情報メディアセンター長 坂東昌子

2005年12月22日、その日は朝から雪がちらつき、夜から大雪になるという予報でした。そんな中、情報メディアセンターの新しい企画であるプレゼンテーションコンテスト（以下、プレコン）が車道コンベンションホールで開催されました。また、12月21日には、豊橋校舎で「情報活用コンテスト」の表彰式が行われました。

今回の企画の紹介をしますと、プレコンはパワーポイントやフラッシュなどのプレゼンテーションツールを活用した、学生のプレゼンテーションを競うコンテストです。一方、情報活用コンテストはWebページやWebプログラミング、コンピュータグラフィックス等を使った作品のコンテストです。

こうした新しい試みは、名古屋・豊橋の両情報メディアセンター（以下、メディアセンター）で始まりました。旧情報処理センター（以下、センター）が、2004年度から「情報メディアセンター」と名称を改めて、ようやく新体制での企画が動きはじめました。

時代は今、動画の時代に突入しつつあり、パワーポイントだけでなくビデオ映像も取り入れた教材が少しずつですが、本学でも試みられるようになりました。かつて愛知大学で「情報処理教育」というものが始まった時代に、「ともかくコンピュータに慣れるには、学生達にタイピングの練習を！」を目標に、センターでさまざまな議論を重ねました。ある時、私の知人が使っていた「ベーシック」という簡単なプログラム言語で作ったタイピング練習ソフトがあることを知り、「それをいただけませんか」とお願いして、使わせていただくことからスタートし、そのタイピングソフトのプログラムを愛知大学の事情にあわせての改良を重ね、試行錯誤の結果センターの相談員たちと一緒に愛大版「タイピングソフト」を開発し、完成させたことを思い出します。あの頃は、どこの大学でも情報処理教育を手探りでやっていた時代で、皆で知恵を出し合い支えあって授業を進めていました。そもそも、情報は独占するものではなく、共有するためにあります。ひょっとしたら情報というものの原点には、黎明期のセンターにあったような精神がみなぎっていたのかもしれない。

当時は、高価なコンピュータを購入するのは大変なことでした。コンピュータがどうしても欲しいといって、親に頼んで「借用証」を書いて買ってもらった学生もいましたが、ほとんどの学生はコンピュータを使いたければセンターに行くしかなかった時代でした。センターには当時から学生の助けも必要ということで、「相談員」制度がありましたが、相談員達は、自分の仕事の時間帯でなくてもセンターにやってきました。そんな相談員の中から、高度な情報処理技術を身につけて、今もそれを仕事にしているプロが何人かおられます。当時のセンターにはいつも人が集まり、新しい技術知識の交換やソフトの評価を議論する雰囲気がありました。こういう集団の中で、当時の情報処理教育の一翼を担ったタイピングソフトのような作品が生まれたのです。あの頃、学生のみなさんのタイピン

グの腕を上げようと、毎年タイピングコンテストを開催してにぎやかだったのを記憶しています。

月日がたち、パソコンが手軽に買える時代になり、パソコンを使うためだけにセンターに学生が集まる時代ではなくなりました。そして、以前ほど教員も学生もセンターに自然に集まるという時代ではなくなってずいぶん経ちます。

さて、プレコン・情報活用コンテストの話に戻りますが、これらのコンテストの素材を作るためには、動画などを入れようとする、ちょっと高度なソフトや機材が必要になってきます。幸い、メディアセンターには現在みなさんがコンテストの素材を作るためのソフトや機材が揃っています。今回のプレコン・情報活用コンテストを契機に、メディアセンターが再び人の集まる場として意義のある時代になったのかもしれない。そうすると、センターに人が集っていた時代のような、活気あるメディアセンターが戻ってくるということにもつながります。人が集まれば、どうしたらうまいプレゼンや作品ができるか、といった交流が始まり、交流が始まるとさらに高い目標に向かってみんなの中に共同作業が始まります。人が集まることこそ、最大の創造活動のための条件なのです。ですから、できるだけ「ちょっとよっていこうかな」と思わせるような環境が必要です。もう1つ、1998年に名古屋校舎のセンターが名古屋図書館の上の階というずいぶんと奥まった場所に移動してしまいました。こうなると、学生が授業の帰りにちょっと立ち寄るには遠いのです。図書館の上の階にあるという構造は、残念ながら人が集まりやすい環境ではありません。それでも、何らかのモチベーションがあれば人は集まるでしょう。今、私が思うのは、人が集まり、交流が始まり、そして共同作業によって、メディアを駆使した教材や教育研究ができる環境づくりです。

プレコン・情報活用コンテストではたくさんの学生達が工夫を凝らして、発表してくれました。そして、プレコンに至っては雪の日にもかかわらず、熱気あふれる発表をしてくれました。採点を引き受けてくださった皆様のご協力に感謝するとともに、2006年度は、もっと持続的な取り組みにしていきたいと思っています。ゼミやサークルの皆さんが、たくさん応募して活躍してくれることを願っています。

センターの中にあるメディア教育開発室は、プレコン・情報活用コンテストをはじめとした活動の準備ができる中心的な役割を担っていききたいと思っています。そして、多くの皆さんの目にふれるだけでなく、今まで以上に知的好奇心や目標設定への意識を高揚できるメディアセンターを目指して、今後ますますの努力を続けていきたいと思っています。